

蛇の好きな男

昔、当目（とうめ）に与平て家があってな、親父の五助ちゅうがもの好きな男やって評判やった。

ある田植上がりの日、落取りに行つた谷間で見たこともないでっかい青大将に出会った。五助はもの好きやから、

「汝りや（わりや）、でかい奴じゃ、どうじゃ、俺の家へこんか、家の蛇にしてやるぞ」と云うたら、人間の言葉がわかつたが、その蛇が一緒について来て、屋根裏に住みついてしもうた。

母ちゃんや息子の弥吉は気味悪がつたが、五助は、「青よ、青よ」と可愛がり、何かと食べ物をやつとつた。

青は特に餅が好きやつたから、餅をつくたびに、青にも分けてやるのを母ちゃんや弥吉はもったいないと、思うとつた。

こうして青が与平の屋根裏に住みついてから、与平の家は、米も良うとれて、することなすことまいこといって、二十年程で当目の指折りの身代となつた。

その頃に青は、六尺にもなり白うなつて、まるで白蛇様みたいやつた。

ところが、五助が六十で死んで、葬式が済んで、四十九日の法事が終わつたよさき、息子の弥吉が屋根裏に向こうて、

「青よ、親父はお前を大事にしとつたが、俺は長いもんは、見るがも嫌なんじゃ。

もう親父も死んでしもうたこつちやし、お前もどつかへ行つてくれ」と大声で言うたと。

すると、青は次の日から姿を見せんがになつた。

弥吉は、

「やれやれ、あつさりしたわい」と喜んでつたが、それから与平の家は、病人が出るやら、する事なす事まいこといかず、五年ほどでみるみる貧乏になつてしもうたと。在所のもんは、

「親の大事にしとつた家蛇を追い出したからや」と、噂したがやと。家蛇てが、殺いたり、追い出したりしてはならんという事やそうな。



八助といぼ地蔵様



昔々のことじゃ、河内の在所の中程に、誠に働き者の八助と云う男がおったと。この八助には、まっこと心配な事やあった。

それは、手にも足にも沢山のいぼがあつて、『いぼの八助』と言われて、「いざ悪い」と、若い者から爪はじきにされとった。

皆二十才ほどになると嫁さんをもろうたけど、八助は、二十五になつても嫁に来る娘がおらんのだ。

嫁の欲しい八助は、思い余つて、毎日毎日お天道様が昇ると手を合わせて拜んでおつた。

「どうか、いぼを治してください。お頼みます」と。

そうしとると、ある晩八助は夢を見た。

お地蔵様が夢枕に現れて、

「われは鉢伏山の石仏じゃ、鉢伏焼亡の折、寺男に背負われて、鳥ヶ平滝まで来たが、その者が行き倒れて埋もれたままじゃ。いぼを治したかったら吾を探し出して在所

まで背負つて行け。歩けなくなつたらその土堤に湧いとる水を付けるとよい。きつといぼが治るであろう」と、言われて目がさめた。

八助は、「ああ、夢じゃったか」と思ったが、嫁さんが欲しい一心から、きつそく鉢伏山に登り、鳥ヶ平滝あたりをくまなく探すと、お地蔵様に似た石仏が出てきたので、「きつとこれであろう」と背負つて在所まで帰つて来た。

ところが、高畠で急に石仏が重くなつて歩けんがになった。

そこで、土堤に「どっこいしょ」と石仏をおろして休むと、なんと不思議や、そこには水が湧き出とった。

八助は今朝の夢はまさに、正夢。夢のお告げの水はこれに間違いないと、すぐにいただきながら、手や足をあらうと不思議な事に、三日程でいぼは次々と落ちて、綺麗に治つてもうた。

八助はもう、もったいないやら、嬉しいやらで、石仏様を手厚くお祀りしたと。

いぼの治つた八助は、もともと働き者やつたさかいに、これ又美しい働き者の嫁さんが貰えたそう。八助の話が広まって、河内のいぼ地蔵と云えば知らん者（もん）なおらんようになり、今でも水は、こんこんと出て、いぼによく効くと評判やそう。

息子に送ったぼた餅



ある家の、おばあさんと、その隣のおばあさんとの会話ですと……

「ああ今日も良い天気でありがたいこっちゃんのう」「ほんとやほんとや、もったいない（ありがたい）のうけ」「なんか変わったことでもないかいの」「別にないのう、そうやそうや、そつでもものうかい、こんな話を聞いてきたぞかいの」「どんな？」

畑の土手にねまって（腰かけて）二人で、

「電気ちゅうがついて、夜さりも明るいでもったいないのお」

「ハイカラな世の中や来たもんや、長生きしとりやあ良い事もあるわいの」

「ああ、そうやそうや、電気ちゅうもんや明るいばっかしじゃないげとかいの」

「ほう……どんな事あるいのん」

「おら方の郵便局に電話ちゅうもんがあるじゃろがかい、ほら、あつこにもここにも電信柱立つとるやろか、電話ちゅうもんが出来て用やあれば行つてこんでも大阪のおつさまも、金沢の姉とでも話する事や出来るげとかいの」

「ほお……ほんとかいねん？」「さきがた郵便局行つて、東京のおつさまとも話した

ぞかい、郵便局に行きやあ電話あるげし……」

それを聞いたおばあさんは、「そうかそうか、良い話を聞かしてもらつたもんじゃ。おらがおつちゃんなあぼた餅大好きやつたが、そんな便利なもんがあるがなら送つてやろう」と思て、夜さり小豆炊いて、甘いあんこべつたり付いたでかいぼた餅をこしやえて、東京のおつちゃんにお重いっぱいにして送つてやろうと思うたげと。

ほどれりやだちかんさかいに、風呂敷にしっかりと縛りつけて、近くの電信柱にしばつつけて、手合わいて、

「どうかどうか東京のおつちゃんにやつて下されや」と、家に帰つたげと。

夜や明けるか明けんに、届いたか心配になつて見に行つたげと。

そしたら、なんと早い、お重の中やすっかり空っぽになつて、あんこ一粒残しとらん、風呂敷もほどけたままやつたげと。

おばあさんはすっかり喜んで、「ああ電気ちゅうもんはなんちゅう便利なもんやら、早や食てもうたもんで空っぽのお重や戻つて来とるわいや。おらが息子らしいわいや、ありや子供の時からちゃわ（そそっかしい）やつたが、風呂敷さえ縛らんと送つたもんで」と、満足して空っぽのお重を家に嬉しそうに持つて帰つたげと。

……ぼた餅はカラスが全部よばれてしもうたがやといねん。

弘法様の池

昔々、黒川の在所の東という家に、弘法様が泊らっしゃったげと。

その家のばあ様や碾き臼（ひきうす）に粉を引いているがを見て、泊めてもろうたお礼じやと、碾き臼をくれしやったと。

その碾き臼は、ようすれたもんで、ばあ様はとっても喜ばっしゃった。

ほしたら弘法様は、

「他になんか弱ったことあないかいや」と聞かっしゃった。

ばあ様や、

「ワラ谷に水や無うなつてよわつとるわいね」と言うた。

「ほんなら」と言うて、ワラ谷の田んぼの所を、弘法様や杖でつついたら、水や湧き出したげと。

それからというもんな、水や絶えること無うなつて、東の衆が喜んでおったげと。

はやけどなあ・・・ある日の事、近所の嫁さんや、その水で、赤ん坊のおむつを洗うたら、水や急に減つて、しづく程しか出んがになったもうたげと。

今でも弘法様の池として、若いかあか（嫁）らちはその頭（かしら）には足を入れんようにしとる。

今でも年寄りらっちゃ、田んぼや、山に行くとき、

「昔これは弘法様の池やつて、言うたね」と言つて通るわいね。



舞い下りてござった俺が在所の脇掛様



昔々、こんな話や黒川の在所にあったげと。

どんなこっちゃと言うたら、空から脇掛様が下りてござったという話や。

あるとき、角ちゅう家のおかつ様（奥さん）や田んぼに苗取りをしておったげと。

そしたら、どこからともなく、空から何かふわりふわりと下りてきたげと。

何じやるか、と思うて見ると長細い紙みたいな、それとも布きれみたいなもんな、おかつ様の上に下りてござったげと。仏様みたいやな、と思てとにかくばち傘（蓑笠）をぬいで、その下にかぶった手拭いを広げて、両手で受け止めたげと。

とにかく家に持って帰ってしつかり見たら、仏壇におらっしゃる脇掛様によく似ったげと。

どこからござったが脇掛様は、すすけて真っ黒になっとって字も目を細めて見んとわからん程やった。

その仏様を、角家では、「どんな縁で降りてござったもんじゃら」と、大事にお守りなさったげと。

角のおじいさんという人は、大変な後生願いで三六五日お仏供様（ご飯）を絶やさんと、朝晩お参りをしottaげと。

そのお仏様は、不思議な事に、座敷に人が泊まるのを嫌がったげと。

お客様が座敷で泊まっても、なんとなく寝つきが悪うて、寝る事が出来んなんだげと。一晚中寝つけんちゅうことで、それからというもの座敷には客を泊めんようになったげと。

又、女の人や、ねんね産むときでも、本建には絶対産まんと、廊下や、納屋で生んで、お湯を使うて綺麗になった後に、本建に移ったと。

最近までそうした習わしを守ったげと。

又、後生願いのおじいさんは、どんな遠いところのお寺のお参りにでも出かけて、夜てばって暗うなつて道がわからんがになつても、いつの間にか六尺先には御坊様や道案内をしてくれた、と聞いたるわいねん。

そりゃ、仏様をお守りしとる御礼の為や、とも昔の人や言うてるわいねん。

仏様が舞い下りてござったんは、お仏壇のお参りもせんと、なまくらな家の者がおつて、仏様やその家に愛想尽かして出てしもて、黒川の角さんの家の所に下りてきたがじゃあないかという話やわ。

『その脇掛様は今でも角家にお守りなさっています。』

病を治した十郎原のお地蔵様

俺ら子供の時やったな。七つや、八つの頃じゃと思う。囲炉裏に座って聞いたもんや。長五郎のばあ様は炭俵（きんごら）を編みながら語ってくれたもんや。

十二月の寒い時期やった。長五郎の息子や、頭が痛うなったちゃ、ひと月でもふた月でも「頭痛い、痛い、痛い」と言うて寝るげと。

そんな病を持った息子がおって親共の心配の種やったと。

あるよさがた（夕方）、雨やひどく降るがに、ごぎをかぶったでかい男共が三人連れでござって、立っとったと。戸を開けたらどう言うと思うたらのう、

「今夜泊めてくれ」ちゅうこつちゃ。

そしたら長五郎のかあか（女房）、

「あんたらつちや見たとおりこんなアベタな子供（小さくてやかましい）おっし、おまけに「頭痛い、頭痛い」て寝とる病いど（病氣がある）の息子がおって泊められんさかい、どっか他の家にしてもらわれんけ」と頼んだと、そりゃけれども、「どうしても泊めてくれ」て言うたと。

「病いどがおるがなら治してやる」と言うたもんで、

「そんならちよっこし待っとって下し、とうと（旦那）に聞いてくるさけ」と、家の中に入って行つたと。とおとが、

「治してくれるがなら泊まってもらえや」ちゅうもんで、話や決まったげと。

三人の男らつちやわらじをぬいで足を洗うとる間に、長五郎のかあかちゅうもんな、まあ、手早いもんで、一時（いつとき）の間に飯を作って食べさせたと。

ちよっこし休んでから、

「さあさ、そんなら病いどがあるがなら、治してやるさけ、ここに連れてござれ」と、言うたと。

納戸にいつて、息子に言うて、やつと連れてきたげと。そしたら、針箱みたいなもん出いて、三寸もあるかのう、そんな針を頭の毛の生え際全部にうつて、手でもみ込むようにしたげと。途中で息子や、

「やあや、やあや、頼む、おいてくれ（やめてくれ）」と言うてどうにもならんし、おいたげと。

そしてまあ寝る事にしたげと。

夜さり男らつちや寝とつたら、

「頭痛い、頭痛い、頭痛い、頭痛い」と、うめいとる声が聞こえとつたと。

三人の男らっちゃ朝になって、顔洗うて、

「俺ら（おら）飯よばれりゃ行くげが、俺ら行ってしまや、又、頭痛むぞ。もういっぺんここに連れてくりやどうや。治して行くがのう」

「やあや、やあや」ちゅうがを、とうとやだまかいて、連れてきて頼んだげと。

男らっちゃ、又、頭じゅうに針いっぱい立ててもみ込むようにして、「き、こつで針を抜くだけやさけ、後は治るぞ、病まんぞ」と、出かける用意をしにかかったと。

男らっちゃわらじを履く間に、長五郎のかあかや茶道具やら子供やら手につくし、片づけやつとすまいて、おち送りに出て見りゃ、早や影も姿もない。

草履つかけて、あたしやの方やら、ごよもの前見たけども見えんし、人に聞いても知らんて言うし、「不思議な事もあるもんやな・・・」と独り言を言うて家に入ったと。

そして、日の十日も経ってから、神谷のベツチョウサ（あだ名）が、

「俺ら逢うたぞかい。えん谷の石の休場に炭かんで休んどったら、十郎原の方にいったぞかい」

「どんな顔しとった」と聞いたたら、

「ざま（背）のでかい、色の黒い達者そうな男や三人連れにだまって通って行ったと。」

在所のもんは、

「そりや十郎原の地蔵様じゃないかいや」と言うたと。

そして、長五郎のかあかや、早速お礼参りに行ってきたと。

それからちゅうもんは、息子の頭痛いがもすっかり治ったと。

在所の者は、

「そりや、長五郎のかあかや、お地蔵様の掃除やら、お花立てるやら、お供え物するやらして、お参りによく行っただかい、そんで、お地蔵様や治して下さったがじゃ」と言い伝えたげと。

『今でもそのお地蔵様は、そこに三人御揃いでおらっしゃるそうです。』



大蛇を生んだ女

あのな、とんと昔ある所に小さい在所があったげといや。

家々には、年寄りや、親共、子供と、大勢おったげと。昔やったしそやったわいや。代々そんな風なもんやったけど、とおとと、かあかと二人だけの子なしの家やあったげとそな。

ところがな、運や悪いもんで、とおとや早う病になつて死んでもうたげと。

それからちゅうもんはな、田んぼや畑、山にと、それはそれは忙しい毎日やったげと。

人より遅れて仕事やつと終わる頃には冬も近うなつておつたと。

それでもな、冬になれば男衆の居る家の者は、たいてい山に行つて、炭焼きの仕事で冬を過ごしておつたげと。

とおとのおらんかあかは、家の中で藁仕事、縄を縫うたり、こも編んだり、筵作つたり、一年中履く草履と、色々なもん作るがに毎晩夜なべして、それが冬の仕事やつたと。

そりからや、ある晩も夜なべしとつたらな、

「外は雪や降つて、風やひどい荒れとるな、明日の朝起きりやどんだけこそ降つとるげら・・・」と、独り言を言いながら、そろそろ寝ようかと、藁をしもつて囲炉裏の火をいけよう（埋めよう）としとつたら、大戸の方やガタガタといぶれておつたげと。ひどい外や荒れとるな、と、大戸（玄関・入口）の方を見たら、こもの後ろからなんじやら人やおるような氣して、あわてて出て見たげと。はつきりはわからんが、どうも人の様なものや見えただげと。

よう見たら、御坊様（ごぼさま）みたいやつたもんで、戸を開けて見たらやつぱり御坊様や立つておられたげと。

その方の言うには、

「一日中歩いてここまでやつと来た。日が暮れてしもうたしどうにもならん。あの峠を越える事は出来んし、弱つとる。どうかどうか、こんにゃ（こんばん）一晚泊めてもらう事できんやろか」と、手を合わせて頼んだげと。

根性の良いかあかや、疑う事もなく、ああ気の毒な御坊様やと思たげと。

頭の笠や、杖（ちようば）、足の草鞋やちびたそう（冷たそう）に雪で真つ白になつておつたげと。

「さあさ」と家に上げて、囲炉裏の火をいけてあつたがを又、火箸でほじり直してあつたつてもろて、飯と温めなおしたおつけと漬物の夕飯をおまして（あげて）、その晩は

寝てもうたげと。

次の日かあかは、朝早うに起きて粗末ながらも朝飯をこしやいて（作って）おましたげと。そして昼になっても、もたもたとしとるし、夜さりになっても、もたもたとしとるし、へして（一日）たっても、二日たっても三日たってもなあんも行かんげと。しまいには、かあかの薫仕事の手伝いもしてくれたげと。

そうしとる内に、とうと夫婦になつてしもうたげと。

冬過ごいて、やがて雪も終わろうかとしとつたある夜朝に、かあかやふと目や覚めたげと。

寢間（ねま）を見たら坊様やおらんがに氣や付いて、いつとき待っておつたがいつまでたつても戻つて来なんだげと。

不思議に思て、大戸の戸を開けて外を見たら、人の足跡らしいものもなあんもないけど、なんの跡やらわからん曲がりくねつた跡やずうと向こうまであるだけやつたげと。

「不思議ななあ」て思ておつたけど、それきり御坊様の姿を見る事はなかつたげと。そして温い春になつて、田んぼ、畑の仕事が始まつたげけど、かあかや、どうも腹具

合や悪なつて、腹やちよつこしでこなつて来たらしい。はらんだ（妊娠した）げといやい。人に会うがも恥ずかしいし、人に会わんようにしとつたげと。

在所のこつちやさけ、家と家や離れとるし、一日中会わんようにしとつたげと。

だんだん腹やでこなつてきてな、産婆に診てもろがも恥ずかしいし、一人して納戸に産むがに度胸決めたげと。

そして、とうとうその日や来たげといや。

「産んだがは、産んだけど何産んだげと思う？」

「蛇の子を産んだげといや。」

かあか、びつくりして腰や抜けたといやい。氣や遠なる思いがしたと。蛇の子は腹減りや、あんま（おっぱい）飲みにつくる（胸）に入つてくるし、腹やふくれりや納戸で寝てな、又、腹減りや、あんま飲んでおつたら段々とでこなつて来たげと。

山に仕事しとりや山へ、ぐわあさぐわあさとかい音する程でこなつて、夜さりや、夜さりで納戸に寝とりやウロコや光つて、寢間いっぱい皿になつとるもんな、そりやそりやあ恐ろしいほどになつたげと。

段々恐ろしいなつてきたげけど、殺すわけにもいかんし、どっかに身を隠そうと思うようになつて来たげと。

納戸に蛇や寝とる間に、夜朝に家をそうつと出て、船のある所に一心に逃げたげと。

船に乗って、海を渡って北海道でも行ってしまうばいくらなんでも、がって（追って）は来んやろうと、船に乗ったげと。いよいよ船が出る時や来たげと。
かあかや息をこらいて（ころして）、その船で祈る思いでおったがや。
ほんでも時間や来ても船が出んさかいに、人やざわざわと騒ぎ始めたげと。
なしたげろう？、と胸騒ぎやして、見たら、納戸に寝さしておいた大蛇が目覚まいたら、かあかやおらんだもんで、ふがかいて（匂いをかいで）がって来たげと。
そして、かあかや船に乗つとるもんでそれを出さんこうと、そのでかい体をぐるぐると、船に巻きつけておったけど、その格好ちゆうたら、話するだけでも恐ろしいもんやったと。
口をでかいがに開けて、体中ウロコ逆立てて、一心不乱に船に巻きついとった。
それを見て、とうとう、かあかは、どうにもならん様になって、海に身を投げて死んでしまうたげと。
「吹雪の夜、大蛇や人間に化けて来たげといや。女房ちゆうもんな、いつでも油断せんとかにやだちやかんげぞ（油断してはいけませんよ）」



大形の親っ様とかわうそ

昔々、河内の棟さんと言う名字で、屋号で大形（おかた）さんと呼ばれとるもんがかった。

地主で苗字帯刀を許された家柄やったと。

柳田の白山神社のカギ取りを、刀をさして馬に乗って行かれた立派な方やったそうな。その親っ様がある日、山仕事に出かけ、仕事をしとったとき、物音に気付いて見たら、かわうそがおとし（わな）にかかってもがいておったもんで、「かわいそななあ」と思て懸命になつてはなしてやったと。

「よかったなあ」と思いながら家へ帰って夜を明かしたと。

一晚たつて、朝起きて馬屋の蓑笠を掛けるカンコをふと見たら、魚がカンコいっぱいに吊るされとったと。

うちの者（もん）なびつくりしたげけど、親っ様や、きんの（きのう）のかわうその話したら、

「かわうそや持つてきてくれたがでないかいや」と、喜んでよばれた（いただいた）げ

と。

毎朝、毎朝、カンコいっぱいに魚が吊るされとつて、これでは木のカンコが折れるかもしれないと思つて、金（かね）のカンコに取り換えたげと。

次の朝からは、かわうそは魚を運んで来んがになつた。

かわうそは、金のカンコ好かなんだがかな。

それとも欲の心出たさかいかな。神仏様の思し召しかと感じたそうな。



天狗平の御所桜

今から数百年も前のこっちゃけど、鉢伏山の下の山間（やまあい）に、めったに人の入らんとこあったげけど、棟、紺谷、木保の三家族や移り住んできて、木地師したり、炭焼きしたりしとったげと。

山や広て木や沢山あったもんで、移ってくる者も増えてきて、そうなると畑や田んぼも増えて来たげと。

木地師らっちゃ天狗平っていう高い場所に住んどったもんで、出来たお椀も天狗椀と呼ばれとったげと。

その頃は、木地師は同業の祖神として、惟喬親王の祀られとる江州（滋賀県）の御所へ奉仕し、修行せんならんかったげと。

天狗平の木地師らちも、御所へ行ったげと。

ほしたら御所に、今まで見たこともない美しい、エドヒガンという桜や咲いもったもんで、

「こりや土産にせにやららん」と、苗を持って戻って、天狗平に植えたげと。

木地師らっちゃ桜の木を、まめに世話したもんで、段々でこなつて美しい花咲かすがになつたげと。

その桜や、いつの間にやら『天狗平の御所桜』と呼ばれるようになって、まわりの衆も世話したり、花見してきたりしたげと。

『桜の木は、県内でも稀な大きさに成長し、春には見事な花を咲かせるため、村の文化財になりました。』

平成になつても、在所の若い者達が世話をしており、春の花の咲く頃には、遠い所からでも見に来る人が絶えないそうです。』



猿鬼伝説

むかしむかし、そのまた昔のこと。

奥能登の岩井戸というところに、おつそろしいほどひねた猿の一族がおったそう。身の丈は人間よりもはるかにたこうて、体じゅうが毛もじゃらけ、目玉がきらきらっと金色に光って、頭に角をはやかいておるもんやきかい、人々は恐れきろうて「猿鬼」と言うたがやと。その猿鬼が奥能登一帯を荒らしまわって、内浦から外浦、羽咋の奥山から珠洲の果てまで、千里の道のりを歩きまわったと。

猿鬼は転々と棲み家をかえ、棲み着いたところが輪島の西山の釜ヶ谷というところやった。有力者である善重郎というおやっさまの言うことをよう聞いて、漆かきの手伝いをしとったといね。「こりや猿鬼もかたい子になったもんやな」と思うたなれど、やっぱり地金が出てきて、人々に危害を与えたり、ものを盗みだいたり、悪いことの三昧をしてしもたがやと。西山の人たちや「猿鬼どもはおかれん。なんとかしておいはらってしもうまいか」。

ほしたら、猿鬼らつちや西山の釜ヶ谷から三里もあるかもしれん。当目の岩屋の洞窟

に最後に棲み着いたがやと。

不思議な洞窟で、満ち潮になれば曾々木の海からぎょうさん魚が上がってくるげんと。猿鬼どもはその魚を食料にしておったなれども、そればかり食べてもおられんさかい、村々の田畑を荒らいてあるくは、しまいには人々に悪いことをしてもた。村人たちは弱りはてて、守り神様にお願いしとったがやと。ほしたら神様たちがお集まりになられて相談された。

「猿鬼どもを生かしとくわけにはいかん。退治してしまいまいか」。

まず、羽咋の気多大社の大明神様が大将になって、三井の大幡神社の神杉姫様が副将になられて、猿鬼との闘いがはじまったなれども、弓矢やら刀やらでもとてもじゃないが駄目やった。

神杉姫様が稲舟の浜を歩いていらしたら、打ち寄せてくる波の音の中から、いい知恵のつく歌が聞こえてきたがやと。

「白布に 身をかくいて筒の矢で 射させたまえよ神杉の姫」(白い布で身をかくし、筒の矢で目玉をねろうて放てば、きつと討ちとることができるやろう。)

神杉姫様は「天からのお告げ」やと大変感動されて、大明神様に申し上げた。さっそくその明日、神々様が筒矢を作り、一番いい布を織つとる一布からたくさんの白布を献上してもろた。揃うたところで、日の暮れ時に、洞窟の前に明々とかがり火を焚い

て、筒矢を持って、歌にしゃぎりに踊りに太鼓に笛に、極楽のように賑やかにした
がやと。そのうち、賑やかしいがと明るいがと、神杉姫様のような美人が大好きや
ったもんで、猿鬼どもがのそりのそりと出てきたところを筒矢もろとも目玉を狙う
て放されたがやと。猿鬼は目玉に毒矢が刺さりびっくりしてもて、ぐらぐらと倒れ
てしもた。さらに神様たちが毒矢を撃ち付けたら動けんくなってしもて、神杉姫様
が一尺二寸の名刀を抜いて、最後のとどめを刺された。そうして一匹残らず退治され
たがやと。猿鬼の黒い血が五十里までも流れていくわ。それはそれはひどかったら
しいがです。

村人たちは喜んでおったがなれども、大箱に葬った猿鬼が今度は火玉になって出
て歩いたと。みんな恐ろしがって夕方になると誰一人として外に出るもんはおら
なんだ。「成仏できなんだがに違いない」。神杉姫が十七日間お寺にこもって
お経様を読んで供養をされたんやと。そしたら生ぬるい雨上がりの西の空にで
かい球がとんでいってしもたげんて。

それからというもんは、平和な日暮らしができるようになったげと。神様
たちへの感謝の気持ちと猿鬼の霊をなぐさめるために、村人たちが毎日の
ように手を合わせにお

いでていたお宮が、猿鬼の宮として今でも称えられておるがでござい
ます。



うそつきじいさま

昔あるところに、うそばかりついて一生を終えたじいさまがおったそうなの。
在所の衆が言うのとった。

「うそばかりついていたじいさまやったけど、法にもかからず、果報なじいさまやったのう」

そんなじいさまでも、おいぼれになってもたたら、とうとう寝たきりの状態が続いたがやと。あと一ヶ月か二ヶ月の命やろうと、親戚縁者がじいさまの容態を見に来たがやと。ついにお医者さんが来て言うた

「もう一時間や二時間しかもたんやろう」

孫やら兄弟やら家族中がじいさんの顔を見とったら、すいすいと楽そうに眠っとるがやと。「こりやまだ死なんじゃあ」

と言うとったがやけど、ふうつとでっかく目を開けて周りを見わたいて、

「長い間みんなに迷惑かけて本当にすまなんだのう。そのつぐないに、このうちの庭先に甕（かめ）をいけて（うめて）あっさかい、そこに小判を入れておいたるさかいの

う。おらが死んでからそれを開けて、仲良うらと分けさしね」

そう言うて死んだがやと。

「さすがじいさま、いいこと言うてくれたのう」

みんな喜んで、

「はよ葬式すまいて、初七日の勤めもはよ終わらせにや。」

葬式も初七日もすまいて、

「さあみんな、じいさまが言うのとった甕を見まいかい」

ところが、甕にはなくんも入っとらん。ほしたら、小さい紙きれが一枚入っとった。

どんな紙きれやというたら、

「うそのつきおさめ」

家族のもんながっかりするやら、憎らしくなってくるやらで、あいそもこいそもつかいたがやと。

死ぬまでうそついて死んだじいさまやった。



ダブとグズ

昔あるところに、ダブとグズと言う、兄と弟がおったがやと。

ある時、坊さんが一年に一回来てお経様をあげる「おとりこし」をせんならんがになつたら、おととやおかかは大忙しねんて。掃除はせにやならんわ、ごつつお（御馳走）は作らなならんわ、坊さんのお迎えには行かにやならんわ。

ちよっこり兄と弟に手伝いさせな、ということで兄のグズに

「グズ、お前はご飯炊きせえ」

グズはご飯を炊きにかかったんやと。そしたら、飯が煮えてきて

「ぐずぐずぐずぐず」

「なぐんしたちげ！俺の名前ばつか呼ぶけど、要件を言わなだちかんがい（ダメだよ）！」

「ぐずぐずぐずぐず」

腹を立てたグズは、ご飯を囲炉裏の中へひっくり返してしもたと。

一方、弟のダブに

「ごつつおを煮る醤油やないがになつたさかい、お前は下の店行つて樽に入った醤油を買うて来い」

買うまではよかったがやけど、坂道を上がってきたら、

「だぶだぶだぶだぶだぶ」

「なぐんしたちげ！俺の名前ばつかり言うて、要件を言わなだちかんがい！」

腹立ててしても、道の真ん中に醤油をあけてしもた。うちに戻ってきたら、親たちが

「なぐんと情けないもんや！ひとつも役に立たん、面倒なもんどもや」

ほしたら今度は、坊さんをお迎えに行かんならん。兄が弟に聞いたげと。

「どう言うてお迎えにいくげん？」

「寺へ行ったら、黒い着物着たもんがおつきかい、その黒いもんに、お迎えにあがりました。そう言えばいい」

お迎えに行くと、高いところに黒いカラスが一匹おったといね。

「お迎えに上がりました」

「あほーあほーあほー」

うちに戻つて弟に言うて、

「そりゃ、カラスやがいや。寺の中へ入つて言わなだちかんがいや」

今度は中に入ると、でかいともでかい黒い猫がでてきてんといね。

「お迎えに上がりました」

「にゃお」

またうちへ戻って弟に言うたら、

「そりゃ、お寺の猫やがいや」

こりやだちかん、と弟は結局わが身が迎えに行つたと。

そんななくんにもならん、バカな話。

あほ～あほ～



とつとけー！

昔、じゃ様(妻)や木をくべながら(薪を燃やしながら)

「父っ様(とつとあま)、やがて(もう少しで)おう年(おおみそか)や、正月様ござらっしゃるげが(くるけど)俺らみたいな貧乏人な銭もなあし、なんも買われんしひやあだるい(つまらない)のけえ、おう年も正月もないもんじゃのう」というたと。

父っ様や、うーん・・・と腕を組んでおったが、いつときして(しばらくして)

「心配せんでもいいわいや、いい事思いついたわいや」

「なしたとかい」

「明日、夜や明けたらな、廻りのもんに、おらが父っ様今朝死んでもうたと言えやい」じゃ様や、なんてこと言うやら、とびつくりしとつたら、

「俺や縁の下の鳥小屋に隠れとるさけ」て言うて、さっきと鳥小屋に入つてしもたと。「何しとるぎや、早う言うて来いまんや」と、父っ様や言うもんで、在所のもんに言うて回つたげと。いつとき経つたら、在所のもんな

「昨日どま達者やったがにのお」と挨拶に来て、香典を持ってきたと。

じゃ様や弱つてもうて、どうすりゃいいやらとおろおろしとつたら、鳥小屋から父っ様や、「とつとけー！とつとけー！とつとけー！」と鳴いたと。



編集後記

岩井戸の『伝説』『民話』と言えば『猿鬼伝説』があまりにも有名であるが、他に後世に残すべきものはないか、というのが今回の取り組みの始まりである。地域の住民は、ほとんどが老人となり、やがては今を知る人がいなくなるであろう。又、地域の暮らしも大きく変わっている。

子供の頃は、薄暗い囲炉裏の側で、じいちゃん、ばあちゃんに、何度も何度も同じ話をねだったものだが、今は、テレビ、ビデオ、パソコン、ゲームに夢中になり、会話もなく、便利なものを得たが、代わりに失ったものも多いような気がする。今のうちにと気ばかり焦る。「何かを残したい」と。

地区の古老から聞き取り、出来るだけ方言を多くし、語られたままを残したつもりではあるけれど、編集に携わる者も何分、何の経験もない者ばかり。一寸懐かしく、一寸悲しく、そして一寸笑える人が一人でもいたら嬉しいな。

館長 竹橋 尚

岩井戸の民話

【協力団体】

岩井戸寿会 (黒川・大箱)
北栄会老人クラブ (北河内)
巣ヶ前老人クラブ (当目)
(株)ぶなの森 (当目)

【編集委員会】

松谷内 亮子 (黒川)
東 礼子 (黒川) 挿し絵
小田 宏男
川崎 時夫
近田 幸雄
坂下 輝雄
修田 利夫
竹橋 尚 館長
干場 四十美 主事

発行

能登町立岩井戸公民館

石川県鳳珠郡能登町字黒川

電話 0768-76-0226

平成29年3月

目次

蛇の好きな男

八助といぼ地蔵

息子に送ったぼた餅

弘法様の池

舞い下りてござった俺が在所の脇掛様

病を治した十郎原のお地蔵様

大蛇を生んだ女

大形の親っ様とかわうそ

天狗平の御所桜

猿鬼伝説

うそつきじいさま

ダブとグズ

とっとけく！